

明治大学図書館所蔵「長谷川雪旦書簡」とその背景について

齊藤 智美*

長谷川雪旦の書簡とされるものは、現在二通ある。明治大学図書館所蔵の「長谷川雪旦書簡」¹と、都立中央図書館所蔵の『江戸名所図会稿本』²に貼り込まれているものである。明治大学図書館のものは、差出人は「長谷川雪旦」受取人は「齋藤市左衛門」となっている。都立中央図書館のものは差出人「雪旦」受取人「月岑」である。これらを書いた長谷川雪旦は江戸時代後期の絵師であり、『江戸名所図会』の挿絵を描いたことと知られている。受け取った人物の「齋藤市左衛門」と「月岑」は『江戸名所図会』の著者である。江戸の町名主で代々齋藤市左衛門を名乗り、七代目の幸雄（長秋）、八代目の幸孝（県麿）、九代目の幸成（月岑）の三代で『江戸名所図会』を書いた。（名前の後の（ ）内は号である。）月岑は九代目幸成の号である。都立中央図書館所蔵の書簡は月岑宛になっているため、受取人が特定できるが、明治大学図書館所蔵のものは齋藤市左衛門宛なので実際は誰が受取人かは書面からはわからない。

一 明治大学図書館所蔵「長谷川雪旦書簡」について

明治大学図書館所蔵の「齋藤市左衛門宛長谷川雪旦書簡」は、次の通りである。巻紙（15cm × 49cm）で軸装（107cm × 63cm）になっている。

御□届拝見仕候恐乍揃
御安楽被成人奉御喜候
然八先日相願置金子
三百足都合一円慥^二落手
仕候御取込之御中毎度
御苦勞を懸奉恐入候
猶亦深川事清書其外

清書とも近日之内揃参
罷出可申候右御報申候

早々以上

五月十日

尚々先夜八大酔^{ニテ}

罷上^リ申候失礼も御座候哉
御免可申候御隠居様にも

よろしく奉願上候

おきんさませつかく[□]被成

かい物候婦人なき

うち故御あひそうも

なく御きのとく^ニ存候

仍て拝顔之上萬御礼

可申上候以上

五月十日

□□

斎藤市左衛門様長谷川雪旦

この書簡は「五月十日」の日付のみで何年かわからない。³最初は時候の挨拶で始まり、前から頼んでおいた「金子三百疋」を受け取ったことが書かれている。「深川事清書其外清書」とあることから絵の依頼を受けていたことがわかる。「尚々」書以下

はそれ以前が金銭と仕事の話なのに対して、酔って訪ねたことを謝ったりしている。これは何時書かれたものか。斎藤家と雪旦の付き合いが始まったのがいつかは史料がなくはっきりしないため、書簡が何年以降に書かれたものかもわからない。しかし、次の史料からある程度推測がつく。

寛政十年年五月

一 江戸名所図絵 全八冊

丁数凡五百町程

作者 長秋先生

画工 北尾重政

願人 須原屋茂兵衛

同 伊八

『類集撰要』巻之四十六⁴

寛政十年の『江戸名所図会』の「画工」は「北尾重政」として出版願を出していることがわかる。雪旦が『江戸名所図会』と関わるようになったのは寛政十年よりも後と考えられる。長秋は寛政十一年に亡くなっているため、出版願を出したすぐ後に『江戸名所図会』の絵師を変更し、雪旦としたかは疑わしい。(寛政十年当時、雪旦は二十一歳で、絵師として名が知られていたとは考えにくい。)『深川事清書』の言葉から『江戸名所図会』の挿絵の依頼と考えられる。斎藤月岑の残した「江戸名所図会の由来」⁵には父の県麿がある程度絵に描く場所を指定したこと、県麿の没後、挿絵で決まっていなかったところはほとんどなかった

ことが書かれている。「御隠居様」「おきんさま」とは誰か。斎藤家の人を考えると「御隠居」と言われそうな人は長秋の妻と県麿の妻が考えられる。(県麿は隠居しないうちに妻より先に亡くなっている。)⁶「おきん」は当然女性で「さま」とつけるくらいだから、斎藤家の使用人ではなく家族と考えられるが県麿の妻も月岑の妻も名前が違う。「斎藤市左衛門」を県麿と考えたと、「御隠居」は長秋の妻「おきん」は月岑の姉妹ではないかと推測できる。(月岑の日記から姉がいることがわかっている。この日記で、月岑周辺の女性で名前がわかっている中に「おきん」という人物はいない。)⁷「斎藤市左衛門」は県麿か月岑のどちらかだが、特定できる史料がないため、周辺の史料や状況から見ても県麿の可能性の方が若干高いと思う。「斎藤市左衛門」の特定はできないが、この書簡には「金三百疋」とあることから、雪旦と斎藤家の間で金銭のやりとりがあったことがわかる。金銭のやりとりがあったことはある程度予想されていたことだが、史料として確認できたのはこの書簡が初めてである。

二 雪旦の生涯

雪旦の画業の中で『江戸名所図会』の挿絵を描いたことはよく知られているが、絵師を生業としていた以上他にも様々な作品がある。⁶雪旦は安永七年(一七七八)に江戸に生まれ、下

谷三枚橋に住んだ。彫物大工だったとされている。天保十四年(一八四三)に六十六才で亡くなった。

彫物大工

。後藤茂右衛門 文化より天保の今に至る 雪旦の子

聖旦 神田 俳名 五楽 江戸の人なり

始め狩野家の門人となり、雪舟の画風を学びて一家をなす、浮世絵にあらずと云へとも、一蝶の画風をかき、或は唐画の筆意も能す、按に長谷川等伯 始久六、法眼に叙し、雪舟五代と書す、の画裔を統しものなるべし、画法一家をなして板刻の絵本多し殊に江戸名所図会勝れてよし、摺物絵に艸筆のもの多く画けり、一派の名手なり(略)

『増補浮世絵類考』⁷より

この史料から雪旦は彫物大工で本姓は後藤氏と考えられている。一方、雪旦の模写した絵には「金澤宗秀謹而写之」⁸とある。この「宗秀」とは雪旦の名であることが『当時現在 広益諸家人名録』⁹からわかる。つまり、「金澤」も雪旦の姓として使われていたのである。この「後藤」と「金澤」の二つの姓は何か。どちらかが違っているのか。雪旦自身が書いた「金澤宗秀謹而写之」は事実だろう。『増補浮世絵類考』は「始めに」以下の文章は雪旦のことを書いていると思われるが、最初に「雪旦の子」という意味の通らない言葉もある。しかし、『増補浮世絵類

考』を月岑が補っていることを考えると「後藤」の姓が間違っているとも云い難い。現在、わかっている史料からは判断がつかない。

絵は長谷川雪嶺に学んだと考えられる。

江戸ノ人雪舟□三世ノ画裔雪嶺翁ノ門ナリ画ニ巧ナル事
江戸名所図会ヲ見テ□知ルベシ其高名ナルステニ法橋二
任ズ

『書画會粹 二編』¹⁰より

「雪嶺翁ノ門ナリ」とあり当時は、雪旦は雪嶺に学んだと考えられていた。影山氏によると、¹¹雪旦の作品の中には雪嶺の作品を模写したものが複数ある。これらから、雪旦は雪嶺に学んだと考えられる。雪嶺は『武江年表』の「寛政年間記事」の中に当時の知られていた画家として「長谷川雪嶺」とあり、雪旦の師として時代的にも合う。雪旦が「長谷川」を名乗ったのはこの雪嶺との関係と考えられる。（『増補浮世絵類考』では「長谷川等伯」との関わりを指摘している。）雪旦は、残っている作品や史料から、『江戸名所図会』以前は他の本の挿絵も担当し、依頼を受けて絵を描き、絵師としてそれなりに知られていた。文政元年は唐津藩主小笠原家の御用絵師となり、唐津に出かけ、笹屋や高崎屋など江戸の豪商の依頼で絵を描いてもある。¹²高崎屋とは、一緒に東北、信州を旅する程の交流があった。¹²しかし、

その名を広く知られるようになったのはやはり天保五年と七年に出版された『江戸名所図会』の挿絵画家としてのよつである。馬琴は『異聞雑考』の中で『江戸名所図会』の編纂方法の批判をしているが、一方で挿絵を高く評価している。『増補浮世絵類考』でも雪旦の記述の中で名前の出てくる作品は『江戸名所図会』である。『江戸名所図会』の挿絵を評価されたことを雪旦がどう考えていたかはわからないが、六百五十景もの挿絵を描いた作品で苦勞して完成させたことは間違いない。ある日、雪旦が鰻屋で家や周りの様子をよく見て写生をした。その晩に鰻屋に泥棒が入り、昼間の客が怪しいとして雪旦が捕まったが、『江戸名所図会』のために写生をしていたと疑いが晴れて釈放されたという話も残っている。

雪旦は文政十二年に「法橋」に叙せられている。さらに雪旦の絵には「長谷川法眼雪旦六十三歳画」とあるものもあり、その後「法眼」になったことがわかる。¹³雪旦の子雪堤も父と同じ道を歩み絵師としても恵まれた生涯を送ったと思う。

三 雪旦と斎藤家

『江戸名所図会』は、江戸の町名主を代々勤めた斎藤家の七代目の長秋、八代目の泉鷹、九代目の月岑が書いた江戸の代表的な地誌である。『江戸名所図会』の挿絵を担当した雪旦は、そ

の著者である斎藤家の人々と付き合いがあった。しかし、『江戸名所図会』の出版許可¹⁵からすると、雪旦は奥磨と月岑の二人と交流があったと考えられる。¹⁶月岑の日記¹⁷の中に雪旦や長谷川家との行き来が書かれている。この日記には雪旦と斎藤家の交流のあったすべての時期を書いているわけではないが、日常的に双方がどのように関わっていたのかがわかる。月岑日記に雪旦は次のように登場する。

天保二年九月

廿五日、天気よし、長谷川雪旦子来る、当月十五日、奥州■被帰候由、但、高崎屋長右衛門同道、(略)

天保十一年七月

廿四日、小雨、御役所へ出る、御松、

昼後、浅草寺・真土山へ参詣、浅草操芝居見る、御寺に参る、長谷川氏へよる、

『斎藤月岑日記』より

多くがこの程度の内容のため、何の目的で訪れたのか、会って何を話したのかは不明である。「天保二年九月廿五日」に雪旦は奥州から帰った挨拶のために斎藤家を訪れたのかもしれない。ほとんどが行き来しか書かれていないが、特別な場合は用件が書いてあることもある。

天保四年十二月

廿五日、天気よし、須原や伊八日本橋須原や番頭源七、名所図会十冊出来二付持参、(略)

廿六日、曇り、雪旦子■朝草御寺参二行、名所図会出来二付参詣、(略)

天保七年正月

六日、雨、朝■片岡氏へ行、長谷川氏へ行、年中行事板

下持行、(略)

天保九年二月

九日、天気由、名所図会・歳事記出来故、雪旦子父子・すはらやよぶ、

百花園仕出し、よし丁おたミ・お市よぶ、むさしやおきく手伝ひによぶ、(略)

天保九年四月十日

十日、天気よし、

重五郎出、御役所は出る、下谷辺廻勤すむ、雪旦子へよる、ひやうたん鯨の画、書て貰ふ、(略)

『斎藤月岑日記』より

これらは雪旦の絵師としての仕事がかかれていて、ほとんどが、月岑が著者で雪旦が挿絵を担当した本に関する記事である。「天保四年十二月」は、『江戸名所図会』が出来たので月岑が雪旦

に挨拶にいったのだろう。「天保七年正月」は「年中行事」(『東都歳事記』のこと)の板下を持って行き、打ち合わせをしたと思う。「天保九年二月」には、『江戸名所図会』と『東都歳事記』の出版祝いに、雪旦は息子の雪堤と板元の須原屋と共に月杵に招待されている。本の著者と絵師の関係がわかる。最後の「天保九年四月十日」は月杵が雪旦に「ひやつたん鯨」の絵を描いてもらっている。この絵の代金がどうなっていたのかは月杵日記からはわからない。絵師の雪旦と月杵の付き合いがここからはわかる。次も絵師としての別の雪旦の姿が表れている。

天保四年五月

十六日、天気よし、両国河内や二 雪旦会に付行、(略)

天保六年二月

十三日、天気よし、湯立る、雪旦子宅へ発会に行、(略)

『斎藤月杵日記』より

雪旦は会を催して揮毫をしている。月杵日記にもその記事があるが、『古画備考』には次のような記事がある。

画会

当日拙画五百枚書、御来臨之諸君へ呈上、其外 諸名家諸先生 席上揮毫、

来ル三月廿七日、湯島天神社内於「松金屋定七方」相催

候間、晴雨共御光来奉^レ希候、

長谷川雪旦

『古画備考』¹⁸より

このような会は金を払えば誰でも参加して、その場で絵や書を書いてもらうことができた。雪旦が当日絵を描いて、来た人に配ったと考えられる。ただで描くわけではないので、当然雪旦の収入になった。ここでは、「廿七日」となっているが、『當時現在 広益諸家人名録 天保七年版』¹⁹では「雪旦 名宗秀号 巖岳斎叙法橋会十三日」となっている。雪旦は基本的に十三日に会を行っていたようである。月杵日記では、出てくる日が必ずしも十三日ではないがその前後である。雪旦の会の詳しい様子はわからない。雪旦の行動を月杵日記から拾ったが、ほとんどがお互いの行き来の記事である。

月杵日記には月杵と雪旦の個人的な付き合いがわかることが多いが、両家の交流がわかる部分も多少ある。

天保二年一月

五日、天気、浅草辺年始に行、根岸・御寺・観音様・長谷川・村田・吉村なり、(略)

天保十一年五月

一七日、雨ふる、河津氏来る、長谷川氏■かつほもらふ、
『斎藤月杵日記』より

月岑は長谷川家に年始に行っているし、雪旦は鯉を斎藤家に届けている。雪旦は月岑の父の県磨とも付き合っていたから、家同士でやりとりがあることも当然である。家同士の交流があったため、雪旦の書簡には当然斎藤家の家族について一筆書いたのだろうし、酔って訪ねてしまったのだろう。

明治大学図書館所蔵の「長谷川雪旦書簡」は、これまでその存在を全く知られていなかった。²⁰この書簡以外にも知られていない書簡や雪旦の絵、史料がまだあると思う。それらによって雪旦のことがさらに明らかになるよう期待したい。最後に本稿を成すにあたって御助言下さった皆様に謹んで謝意を表する。

註

- 1 請求記号 099.4/65//H
- 2 請求記号 東京誌料 025-27
- 3 書簡中の□は判読不能の文字を表す。(以下の引用史料も同様である)雪旦は『筆耕謝礼控』(文政八年から十一年間)を残していることを、朝倉治彦氏が「解題」(『東都歳事記』³ 一九七二 東洋文庫 平凡社)で指摘している。この「解題」には『筆耕謝礼控』が一九七二年六月下旬、三越における弘文荘の即売会に出品されていたことも書かれている。(現在の所蔵は不明)雪旦の書簡が『筆耕謝礼控』と同時期に書かれたものならば、この史料から書簡の年がわかるだろう。

4 高木元『類集撰要』巻之四十六「江戸出版史料の紹介」、『読本研究』第二輯下巻 一九八八 広島文教女子大学研究出版委員会

5 この史料は現在行方不明である。朝倉無声「江戸名所図会編纂始末(下)」、『此花』¹⁵号 一九一三に一部引用されている。

6 雪旦の画業及び作品が詳しくわかるものに影山純夫「長谷川雪旦考」(『デアルテ』¹⁰ 一九九四 九州芸術学会)と、江戸東京博物館の展示図録『江戸の絵師 雪旦・雪堤 その知られざる世界』(一九九七)がある。

7 岸上探編『温知叢書 四』一八九二 博文館 『増補浮世絵類考』は、寛政の末頃に笹屋邦教が書き始め、享和二年に山東京伝が書き加え、その後、式亭三馬が補った。(太田南畝が書き入れをしているとも言われている)これらを隠士無名翁が天保四年にまとめ、さらに弘化元年に斎藤月岑が補記を加えた。どの文章を誰が書いているのかは全く不明である。しかし、引用した部分に関しては、「天保の今」とあることから隠士無名翁の可能性が高い。引用した史料は、適宜、新字に改めた。は双行の割注を表す。(以下の引用史料も同様である。)

8 雪旦雪堤粉本 国会図書館蔵

9 森銃三・中島理壽編『近世人名録集成 第一巻』一九七八 勉誠社

10 森銃三・中島理壽編『近世人名録集成 第四巻』一九七八 勉誠社

11 註参照

12 岩淵令治「江戸住大商人の肖像―場末の仲買 高崎屋の成長―」

斎藤善之編『新しい近世史 ③市場と市場社会』一九九六 新人物

往来社

13 「法橋」「法眼」とは本来、僧侶の位階であるが、中近世を通じて僧侶以外の仏師、絵師、医師、連歌師にも叙せられるようになった。

14 町名主の様々な仕事や月々の生活は、西山松之助「江戸の町名主斎藤月岑」(『江戸町人の研究 第四巻』一九七五 吉川弘文館)に詳しい。

15 「一 明治大学所蔵「長谷川雪旦書簡」について」参照

16 森銃三氏は「江戸名所図会と斎藤幸孝」(『森銃三著作集 第十一巻』一九七二 中央公論社)の中で県庁が書いた『郊遊漫録』に出てくる「画工雪叟」は雪旦であるとしているが、雪旦が「雪叟」と名乗ったり、史料上に「雪叟」と出てくるものはこの『郊遊漫録』

のみで、本当に雪旦が「雪叟」か確認出来ない。

17 『大日本古記録 斎藤月岑日記一・二』一九九七・一九九九 岩波書店 文中では「月岑日記」とした。

18 朝岡興禎著・太田謹増訂『古画備考』一九〇四 思文閣

19 註&参照

20 江戸東京博物館の展示図録『江戸の絵師 雪旦・雪堤 その知られざる世界』の雪旦の絵と史料がかなり集められているが、その中には載っていない。

* さいとう・ともみ/大学院博士後期課程文学研究科史学専攻